



Title	一九三〇年代の定型詩に関する研究―三好達治・中原中也・佐藤一英を中心に―
Author(s)	武久, 真士
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96163">https://hdl.handle.net/11094/96163</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 ( 武久真士 )	
論文題名	一九三〇年代の定型詩に関する研究 —三好達治・中原中也・佐藤一英を中心に—
<p>論文内容の要旨</p> <p>本稿は三好達治（一九〇〇～一九六四）・中原中也（一九〇七～一九三七）・佐藤一英（一八九九～一九七九）ら三人の詩人に注目し、一九三〇年代の定型詩制作の実態を明らかにしたものである。具体的には、彼らの詩・詩論の分析を通して、定型詩がどのような思想のもと作成され、同時代的な文学あるいは思想をめぐる状況とどのように切り結んだのか、という点について考察している。</p> <p>日本近代詩は大正期以降定型を捨て、口語自由詩が詩壇の主流となってきた。しかし定型がない以上、なにを以て詩を「詩」と呼ぶか、そのアイデンティティがあいまいになっていた。そうした存在様態のあいまいさがさらに増大したのが、散文詩の作成が隆盛した三〇年代前後である。散文詩は形式上小説と見分けがつかない。では「詩」とはなにか。三〇年代詩人はこの問いに答える必要に迫られており、それぞれが詩のあり方を模索していた。本稿で扱う三好・中原・佐藤は、いずれもこうした事態に定型詩という形で対応した詩人たちである。本稿はこの「詩とはなにか」という問題系に対する詩人たちの姿勢を検討し、従来メディア中心に捉えられてきた詩史の研究に型式という観点から新たな光を当てるものである。</p> <p>序章では、春山行夫の詩論を中心に、三〇年前後の《形式主義》がどのような性質を持ったものだったのかを分析した。この時代は《形式主義》の時代であると同時に、《形式》という桎梏から脱することも目指された時代であり、「詩とはなにか」という議論が口語自由詩誕生期と同様に、あるいはそれ以上に混乱していた。三〇年代詩人はポスト『詩と詩論』を意識しながら、この「詩とはなにか」という問いに型式という点から改めて挑戦したのだと言える。先述したように、これが本稿が提示した三〇年代詩史の基本的な見取り図である。</p> <p>第一部で扱った三好達治は、俳句や短歌を意識しつつ、詩の混乱を読者の混乱という視点から問題視していた。モダニズム詩は型的にも内容的にも難解で、一般読者にはついていけないものになってしまっている。その状況を脱するために、「簡単明瞭」な詩として作られたのが、三好の「印象派的詩歌」であった。第一章では、三好が同時代『ホトトギス』派の「主脚両観」論を四行詩に生かし、主観と客観が融合するような詩を作り上げたことについて検討した。それはまた読者の主観と詩人の主観が融合するような詩としても作られており、彼の四行詩は読者の存在を詩に織り込んだものとして評価できる。</p> <p>第二章では三好の歌集『日まはり』を扱った。『日まはり』は行分け短歌集であり、石川啄木などとは異なって短歌を四行分けにしている。これは自身が制作していた四行詩と重なる詩型であるとともに、短歌の音律を切断することができるという意味で、必然的な要請に基づいた分け方であった。三好がこうした詩型を用いたことには、萩原朔太郎の音楽主義的な詩観に対するアンチテーゼの意味が込められている。三好は短歌を四行分けにすることで、短歌を内側から作り替えようとしたのである。</p> <p>第二部では中原中也について論じた。中原は独自の「旋回」型によって、「個」と「全」の一致という彼の理想を表現しており、第三章では特にその点について詳説した。中原の「旋回」詩型では冒頭と末尾の詩句が一致し、詩は円形を描く。そうした「旋回」型の詩ではしばしば「永遠」や「無限」といったテーマが扱われ、それは円形の詩が理論上無限の繰り返しを含むことと対応している。本稿ではこうした中原の「全体性」への志向を、同じく「全体性」を志向した彼の「名辞以前」論や同時代思想とのつながりといった観点からとらえ直した。</p> <p>第四章では、中原の詩がもつ《ずれ》について論じた。中原はベルグソンや西田幾多郎の哲学を運動性という観点から受容しており、それが彼の詩の大きな特徴となっている。中原はしばしば定型を使ったが、それは単に詩に「型」をもたらすためではなく、むしろ定型を《ずら》すことによって運動性を表現しようとしたのである。規範がなけれ</p>	

ば規範からの逸脱もない。いわば中原は《ずれ》のために規範を用いているとも言え、それは定型の定型性を重視した三好や佐藤とは異なる姿勢だと言える。中原の代表作「サーカス」は、このような中原の詩特有の運動性を象徴する詩として読むことができる。

第五章では中原の散文詩について論じた。中原が雑誌に発表した散文詩はわずか五篇しか無いが、そのすべてが詩誌『四季』に発表されていたことは注目される。『四季』は雑誌全体としての主張をもたないメディアであったが、ポスト『詩と詩論』の時代を担う詩誌として散文詩や詩の音楽性の問題については誌面で盛んに議論されていた。中原の散文詩についても、そういった文脈で読むことが可能である。彼は散文詩「ゆきてかへらぬ」や「かなしみ」で、「散文詩」というジャンルを問題としたのみならず、まさに「詩」というジャンルそのものの境界を問い直している。中原は「詩」概念の拡張と再設定を試みたという意味で、『詩と詩論』が行ったことをよりラディカルな仕方で突き詰めた詩人なのだとすることができるだろう。

第三部は佐藤一英を中心に、定型詩の「音」（音楽性）と「文」（書記性）の緊張関係を確認した。佐藤はひたすら詩の「音」にこだわった詩人だが、彼の「音」へのこだわりは、逆説的に近代詩の「音」と「文」が分離不可能であることを証立てることとなった。たとえば第六章で主に扱った「鬼門」は、そうした佐藤の失敗を象徴した詩である。本作は佐藤の理論にしたがって三音律の反復によって成立しており、そうした三音律の「呪文」性を巫女の呪文として解釈することで詩の始原に立ち返ろうとした作品であった。事実「鬼門」における三音律反復は有効に機能しており、佐藤の「音」に関する理論を実作に生かした詩として評価できる。ところが「鬼門」は音の連続性だけでなく、詩の形が「門」状になっているという、独特の書記的な特徴をもつ。佐藤は「音」を有効活用するために「文」に頼らざるを得なかったのであり、それは佐藤が詩論でふれなかった点でありつつも、近代詩における「文」の重要性を逆説的に指し示す形となっている。

第七章では、佐藤独自の定型詩「聯」と、その「聯」を広めるため彼が主催した詩誌『聯』を扱った。「聯」は定型詩の作成容易性を生かし、多くのアマチュアたちを「聯」に《参加》させることに成功していた。さらに『聯』では連句やコラージュの技術を生かした共同制作論も盛んに提唱され、多様な側面からの《参加》を可能にするという独自の詩論を展開していた。しかし「聯」における《参加》は戦時下において《動員》としても作動しており、典型的な戦争協力詩を多数生み出すことともなった。定型詩はその作成の容易さから誰しもを詩人たらしめるが、同時に作品が作れて「しまう」という点で詩に対する批評的な意識を鈍化させる。このことは「聯」に限らず、定型詩そのものが持つ二面性である。「聯」には、こうした定型詩のもつ政治性が明瞭にあらわれている。

こうした検討を経て、終章では四〇年代以降の定型詩について概括しつつ、より長いスパンでの詩史的な展望を示した。戦時下は「声の祝祭」（坪井秀人『声の祝祭』名古屋大学出版、一九九七）の時代であったが、同時の「定型の祝祭」の時代でもあったと言える。第七章で検討したように、定型詩は作成の容易さがそのメリットのひとつである。そうした定型詩の特徴は戦時下の軍歌や戦争詩と結びつき、詩を「早く」「大量」に作るというニーズを満たすこととなった。そうした定型詩の氾濫と対蹠的な作品が、中村真一郎らのマチネ・ポエティクである。マチネ・ポエティクの押韻定型詩は脚韻や音律に関する複雑なルールに基づいて作られており、「聯」のような《参加》性を持たない。マチネ・ポエティクの詩人たちがどの程度戦時下の定型詩を意識していたか分からないが、彼ら彼女らの詩は結果的に定型の《参加》＝《動員》性に対して批評的に機能している。また戦後における小野十三郎による「うた」批判も、「定型の祝祭」批判を一側面として持っていた。小野の「うた」批判は定型批判という以上の射程をもつものであるが、小野は「型」批判を《風景》批判につなげて論じており、小野の《風景》論について定型詩という観点から論じることが可能である。つまり小野は《風景》論を通して定型論を、あるいは定型論を通して《風景》論を展開していたのである。戦中から戦後の詩史的連続性を考える上で、定型という観点は欠かすことはできないものである。

本稿では附章として、近代詩の語り手≒表現主体について論じた章を設けている。小説のナラトロジー論に比して詩の表現主体についてはほとんど研究されてこなかったが、詩を論じるための理論的な整備も今後の研究のためには必要である。本章では詩のもつ抒情性を音声的な「語り」による表現主体の現前という観点からとらえ、近代詩がどのように抒情をシステム化したのかを明らかにしている。

以上のような考察を通して、本稿では三〇年代詩をめぐる状況について立体的に描き出すことに努めた。こうした研究を経ることで、三〇年代に限らない詩史の多角的な検討も可能になるだろう。今後の課題としたい。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 武 久 真 士 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 斎藤 理生 副 査 大阪大学 教授 渡邊 英理 副 査 大阪大学 教授 滝川 幸司
論文審査の結果の要旨	
<p>以下、本文別紙</p>	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 一九三〇年代の定型詩に関する研究

――三好達治・中原中也・佐藤一英を中心に――

学位申請者 武久 真士

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 斎藤理生

副査 大阪大学教授 渡邊英理

副査 大阪大学教授 滝川幸司

【論文内容の要旨】

本論文は、一九三〇年代に書かれた日本語の定型詩について、三名の詩人とその作品に焦点を当てて考察したものである。個別の詩人及び作品についての考察を積み重ねることを通じて、「近代詩とは何か」という問題が、詩人たち自身に改めて問い直されていた一九三〇年代の詩壇の状況を、従来とは異なる角度から浮かびあがらせている点が特徴である。

約 20 万字の分量がある本論は、三つの部に分けられた七つの章を中核に、前後に序章と終章及び附論とを配置する構成になっている。

序章「モダニズムにおける《形式主義》」（以下各章の副題は省略）では、雑誌『詩と詩論』を中心に、一九二〇年代から三〇年代の詩壇においてオピニオン・リーダーとして活躍した春山行夫の《形式》をめぐる言説を中心に検証している。《形式》という言葉が一貫した意味内容を持たないまま取り交わされていた当時の混乱した状況を浮き彫りにすることを通じて、三〇年代に定型詩が書かれるようになる経緯を確かめている。

第一部「三好達治―「印象派的詩歌」への挑戦」では、三好の四行詩を、俳句及び短歌との関わりから横断的に考察している。第一章「三好達治の四行詩における《写生》へと《風景》」では、三好がこの時期に積極的に書いた四行詩と同時代の「ホトトギス」派の俳論とのつながりを、《主客両観》という観点から具体的に検証している。第二章「短歌を切断する」では、三好の歌集『日まはり』を分析し、短歌の音数律が四行に分けて書かれることで切断され、「音」と「文」との間に緊張関係がもたらされていることを明らかにしている。

第二部「中原中也―詩型とはなにか」では、定型を活用した詩人として中原を取りあげている。第三章「中原中也の「旋回」する詩」では、中原が好んで用いた「旋回」する（冒頭と末尾とを照応させる）詩作品と、「個」と「全」との一致を志向する中原の詩論との対応を論証している。第四章「中原中也の詩における運動性」では、西田幾多郎やアンリ・ベルグソンらの思想を中原が参照しており、その影響が、形式を用意した上で《ずれ》を作ることで運動性をもたらす詩法に反映されていると指摘する。第五章「中原中也の散文詩と雑誌『四季』」では、中原の散文詩を精読し、このころ雑誌『四季』誌面に現れていた「詩」という枠組みのゆらぎに対する実践的な応答を、日本語詩の「音」と「文」をめぐる緊張関係を軸に、そこに読みとる。

第三部「佐藤一英―詩の原点へ」では、定型詩の「音」を追究した佐藤の作品と詩論とを取りあげている。第六

章「佐藤一英『新韻律詩抄』論」では、詩集『新韻律詩抄』の読解を通して、佐藤の韻律観と言語観、文学史観との結びつきを論じている。第七章「《参加》と《動員》の詩学」では、佐藤独自の定型詩であり、その韻律論の集大成とも言えるべき詩型「聯」の実態について考察し、極めて容易に作詩できるこの詩型が戦時下にもたらした《動員》の側面にも言及している。

終章「定型詩のゆくえ」では、一九三〇年代に続く四〇年代には定型の概念がどのように変化し、定型詩が書かれたのかを素描している。

附章「抒情という制度」では、物語論を援用した近代詩の分析方法について、中原中也の作品を例に理論的な考察を行っている。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文の価値はまず、一九三〇年代の定型詩という、論じられることの少ない領域の実態を究明した点にある。日本近代文学研究において、詩に関する論考は、小説等の論考に比べて手薄である。とりわけ定型詩は、個別の詩人の研究の中でも顧みられることが少ない。そのような研究の現状に対し、本論文は各々の試作品や詩論、同時代の状況を踏まえた定型詩の読解を行い、これまでは見落とされがちであった詩人たちの一面に光を当てることに成功している。たとえば、同時代においても評価の分かれていた三好達治の四行詩の意義、中原中也が問うた日本の近代詩の型式性、その言語論や詩史論と不可分な佐藤一英の韻律論の特徴などを明らかにしたのである。

また、定型詩という観点から見直すことで、一九三〇年代の日本語詩の世界を、詩のアイデンティティが改めて問われた時代として描き出した点も評価される。モダニズムの時代と戦争詩の時代との狭間として、主に雑誌媒体を中心に把握されてきた時代について、表現型式や手法から迫ったアプローチは画期的であった。

さらに、考察の過程で、日本語近代詩全体に関わる問題を俎上に載せた点も重要である。本論で考察された、独自の韻律を持たない近代詩という概念の曖昧さ、近代詩において「行分け」が果たす機能などは、一九三〇年代の詩に限定される問題ではないからである。

以上のような本論を構成する個別の内容は、既に査読付きの専門誌、全国学会誌などに掲載されており、学界でも一定の評価を受けていると言える。

もちろん課題もないわけではない。論述は概ね平明かつ論理的でわかりやすかったが、稀に誤解を招く表現が見受けられた。また、「形式」「型式」「《型式》」など、論のキーワードになる言葉の使用法にも、やや不鮮明な点があった。内容面では、一九三〇年代という時代そのものに対する把握やその前史との関係性の補足、小説を中心とした同時代における文壇の動きとの関係に、より詳細な叙述が欲しかった。一九二〇年代の詩人及び詩作品にも、まだ触れるべきものが残っていたように思われる。

とはいえ、このような課題は、本論文を今後より発展させる可能性を示す要素でもある。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。